

2018年4月 元捕虜の娘トレーシー・ベルさんが英連邦墓地訪問

トレーシー・ベルさんは今年4月オーストラリアから来日し、広島県福山市に暮らす光藤益子さんを訪ねました。そして戦争中ジャワで捕虜生活を送った父ゴードン・ベルさん（1920～2001）の命を救ってくれた、軍医（バタビアの捕虜病院院長）だった光藤葆光（やすてる）さんへのお礼を述べ、お互いの戦争体験について語り合いました。その様子は4月11日付の朝日新聞に詳しく報道されました。

2015年、トレーシーさんは、光藤軍医に会ってどうしてもお礼を言いたいという父の悲願を果たすため、駐豪日本大使館に調査依頼のメールを送りました。それがP研に転送されてきて、当会の代表内海愛子がかつて光藤夫人にインタビューしていたことわかり、ようやく光藤軍医の消息が判明しました。以後、笹本妙子がトレーシーさんと光藤夫人との連絡を仲介し、今回の光藤家訪問に際しては、福山市在住の会員・小林皓志がお世話役を務めました。

4月16日（月）トレーシーさんは英連邦戦死者墓地を訪問し、笹本、田村佳子、小宮まゆみが同行しました。当日午前10時ごろ、トレーシーさん、笹本、田村、小宮が英連邦墓地に集合。トレーシーさんは20年ほど前に名古屋市内の中学高校で、6年間英語の教師として働いた経験があるということで、流暢に日本語を話す方でした。春たけなわのこの日、英連邦墓地は八重桜のピンク、つつじの赤、そして緑の芝生と新緑が美しく青空に映えていました。入り口の説明板、納骨堂、イギリス区、オーストラリア区と私たちは順に巡っていきました。



墓地の説明をする笹本とトレーシーさん

墓の前で足を止めました。「1945年4月に亡くなったのね、もうすぐ戦争は終わったのに」とつぶやきます。

英連邦墓地を歩きながら、トレーシーさんはお父様ゴードン・ベル氏のことを熱心に話してくれました。「オーストラリアでは父の世代の多くの人は日本を憎んでいました。それでも父は私が日本に行くのを勧めてくれたのです。戦争で何があったかを知る事は出来るけれど、その時の気持ちは行った人でなければ分からない。だから行った人の気持ちを大事にしなければならないと思います。

ヨーロッパやアジア各地でも英連邦墓地を訪問した経験のあるトレーシーさんは、「墓地の型式はどこもだいたい同じだけれど、墓石は立っていたと思う・・・」と言います。「日本では地震が多いので、墓石を横たわせる型にしたのです」と田村。

広いイギリス区から坂を上ってやや狭いオーストラリア区に入ると、ユーカリの落ち葉がよい香りを放っていました。

オーストラリア区では英連邦墓地で唯一の女性の埋葬者エリザベス・グリソン氏の



商船のシュワデスとして福島で抑留されたグリソンの墓

父はいつも頼れる人でしたが、大人になってからは知らない一面を見ることもありました。私が日本で働いている時、父と母が日本に来てくれました。一緒にお相撲を見ての帰り、電車がとても混雑し狭いところに人がぎっしりで、その時父はパニックを起こしました。まわりの乗客が心配して、クーラーの風が来るところに移動させ、席を譲ってくれて、何とか父は落ち着きを取り戻すことができました。」



案内する田村と小宮

トレーシーさん。脚気になると舌が腫れて、口の中のどこに触れても痛いから、脚気になった捕虜は舌を出して歩いたそうです。赤痢にもなったけどデング熱が一番ひどかったようだ、ということでした。「それでも父はジョークを飛ばしユーモアを忘れなかった。ユーモアと、希望と、仲間の助け合い、この三つでオーストラリア兵は捕虜生活を生き抜いたのよ。家族はオーストラリアにいるから絶対大丈夫というのが、父にとって希望だったの。父は捕虜だった時に習慣がついて、その後もずっと体操と歯磨きは欠かさなかったのよ！」とトレーシーさん。「それってラジオ体操かしら？」と私たちも笑いました。

光藤軍医のおかげで泰緬鉄道工事からは外されたゴードン氏でしたが、病気と栄養不足で終戦で解放された時体重は 38 キロしかなかったということです。「赤十字の食料小包は、終戦前にやっともらったけれど、1 回だけだったかどうかはわからない」とトレーシーさん。そして、「原爆投下で多くの捕虜が助かったと言う人がいるけど、自分はそうは思わない。もし一歩譲って広島原爆が必要だったとしても、長崎原爆投下はどう考えても必要無かった。それに長崎は長い間西洋諸国との交流のあった街で、クリスチャンの大きなコロニーがあった。長崎という選択はおかしいとしか思えない。」と意見を述べました。

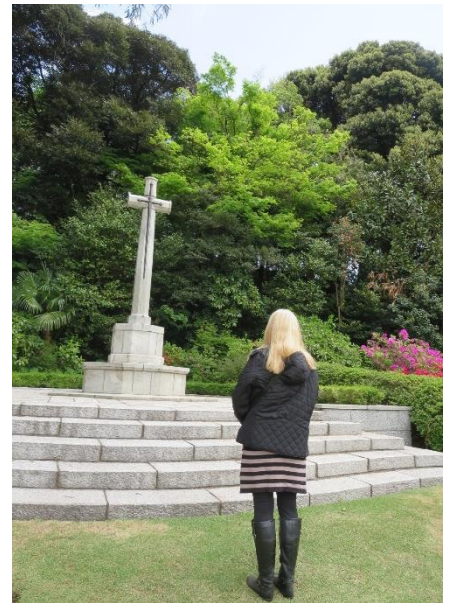
話は尽きず、閣僚の靖国神社参拝や教科書問題にも及び、時間はあっという間に過ぎていきました。

(小宮まゆみ)

「それは捕虜だった時のトラウマですか？」と私たちが尋ねると、「ヘルシップで狭い船倉に詰め込まれた時の気持ちが甦ったのだと思う」とトレーシーさん。お父様はチモールで捕虜になり、パタピアの収容所に入れられるまで、あちこち船で移動させられたそうです。過密で暑く不潔だったヘルシップ。しかもアメリカの潜水艦にいつ攻撃されるか分からない恐怖で、お父様は閉所恐怖症になっていたのかもしれない。

「一番辛かったのはヘルシップですか？」と質問すると、「収容所で色々な病気にかかり、それも

大変だった」と



オーストラリア区の十字架の前で